

# 張九齡の感遇詩について

## はじめに

張九齡(字、子寿、678〜740)の詩文については、彼が玄宗のもとで名宰相として活躍するという輝かしい経歴の持主であったこともあり、従来高い評価が与えられてきた。<sup>(注一)</sup>本稿で考察したい彼の感遇十二首に關しても、たとえば入谷仙介氏は、『感遇』十二首は阮籍の『詠懷』、陳子昂の『感遇』三十八首を承け、李白の『古風』五十九首に連なる長い連作詩で、深い孤独感と、理想の達成しがたい悲しみ、それでもわが道を行く気概があふれる。<sup>(注二)</sup>と、高い評価をしておられる。しかし以下にあげる陳子昂と張九齡の作品を比較してみると、両者の表現、感性の違いにおどろかされる。すなわち、

翡翠東南海 翡翠 南海に巢くふ  
 雄雌珠樹林 雄雌 珠樹の林  
 何知美人意 何ぞ知らん 美人の意  
 驕愛比黃金 驕愛は黄金に比すを

## 加藤 敏

殺身炎州裏 身を炎州の裏に殺し  
 委羽玉堂陰 羽を玉堂の陰に委ぬ  
 旖旎光首飾 旖旎として首飾に光り  
 葳蕤爛錦衾 葳蕤として錦衾に爛く  
 豈不在遐遠 豈に遐遠に在らざらんや  
 虞羅忽見尋 虞羅に忽ちに尋ねらる  
 多材信為累 多材は信に累と為る  
 歎息此珍禽 歎息す 此の珍禽を

(陳子昂、感遇其二十三)

美しい資質を持つ翡翠は、人里離れた遐遠な地に身を置いていながら、山沢苑囿の官である虞の羅あみによって捕えられ、首飾に錦衾にと装われてしまう。自身の価値故に禍が及び、損なわれてしまう存在である翡翠は、陳子昂自身の象徴でもあろう。おそらくこの作品をふまえて、張九齡は感遇其四を作った。

孤鴻海上來 孤鴻 海上より来たり

池潢不敢顧 池潢 敢へて顧みず

側見雙翠鳥 側らに見る 双翠鳥の

巢在三珠樹 巢くひて三珠樹に在るを

矯矯珍木巔 矯矯たる珍木の巔きも

得無金丸懼 金丸の懼れ無きを得んや

美服患人指 美服は人の指ささんことを患へ

高明逼神惡 高明は神の惡みに逼る

今我遊冥冥 今 我は冥々に遊べば

弋者何所慕 弋者 何の慕ふ所ぞ

張九齡は孤鴻に対する副次的な題材として、また陳子昂は主要な題材として、兩者ともに翡翠をもちている。しかし、陳子昂の作品には、たぐいまれな美しさを持つ故に、いかに遐遠な場所におろうとも、自身の生が損なわれてゆかねばならない存在である翡翠に対する激しい哀惜の念いがあふれているが、張九齡の作品にはそれがみられない。感遇其四では、そうした翡翠の運命を冷徹にみつめる孤鴻を導き入ることによって、作品全体が観念的に統一され、生きいきとした激しい矛盾がみられなくなっているのである。張九齡の感遇十二首はどのような特質を持っているのか。また陳子昂との関連でどのように解釈されねばならないのか。本稿は、感遇十二首の特色をさぐり、初唐期の詠

懷詩の流れのなかに、それを位置づけようとしたものである。

一

張九齡は、字を子寿といい、韶州曲江の人で、客家の出身であった。若い頃から文名が高く、長安二年(702)には進士に及第した。官はまず校書郎を授けられ、右拾遺(旧唐書による)、左補闕を経て、司勳員外郎、やがて中書舎人となった。当時名宰相であった張説(667~730)の配下として活躍していたが、彼の失脚とともに洪州都督、桂州都督にと左遷された。しかしまもなく呼びもとされ、ついには中書侍郎同中書門下平章事を経て中書令にいたった。玄宗の信任も厚かったが、開元二十四年(736)に李林甫の讒言に遇い失脚した。荊州大都督長史に左遷され、開元二十八年(740)に歿した。生前は直諫を以てきこえ、その歿後、玄宗は人を用いる毎に「風度能若九齡乎。」とたずねたといわれる。

感遇十二首の諸篇がこうした彼の人生のいかなる時期につくられたかは、種々推定はされるが明らかではない。おそらく一時になったものではなく、人生の折にふれて綴られたのであろうが、この諸篇にはいくつかの大きな特色がみられる。そのうち先ず気づかれるのは楚辭にあやかっていた表

現が多いことである。この節では感遇十二首と楚辞との関係について考えたい。

主として語彙レベルにおける両者の関連についての断片的指摘はすでになされている。<sup>(注三)</sup> たしかに彼の感遇詩には楚辞と共通する、あるいは楚辞的語彙が多い。例をあげれば、

蘭葉春葳蕤、桂花秋皎潔。(其二)

上藏蕤而防露兮、下冷冷來風。(七諫、初放)

草木有本心、何求美人折。(其一)

美人何處所、孤客空悠悠。(其八)

美人適異方、庭樹含幽色。(其九)

思美人兮、擘涕而竚胎。(九章、思美人)

他、楚辞に7例

永日徒離憂、臨風懷蹇脩。(其八)

解佩纒以結言兮、吾令蹇脩以為理。(離騷)

夜分起躑躅、時逝曷淹留。(其八)

待天命兮立躑躅。<sup>(九思、憫上)</sup>

抱影吟中夜、誰聞此歎息。(其九)

廓抱景而独倚兮、超永思乎故鄉。(哀時命)

(注)言已在於山沢、廓然無耦、抱形景而立、長念楚

國。

冥冥愁不見、耿耿徒滅憶。(其十)  
杳冥冥兮羌昼晦。(九歌、山鬼)

他、楚辞に13例

夜耿耿而不寐兮、魂恍恍而至曙。(遠遊)

江南有丹橘、經冬猶綠林。(其七)

后皇嘉樹、橘徠服兮。(九章、橘頌)

蘭葉春葳蕤、桂花秋皎潔。(其一)

楚辞に蘭は42例、桂は23例。

但欲附高鳥、安敢攀飛龍。(其十二)

持此謝高鳥、因之伝遠情。(其二)

因婦鳥而致辭兮、羌迅高而難當。(九章、思美人)

このように、とりわけ其一、其七、其八、其九、其十に

は、楚辞の、あるいは楚辞に由来する語彙が顯著にみられる。また其九に使用されている要素である橘は、阮籍、陳

子昂など従前の詠懐、感遇詩には用いられなかつたものであり、橘の使用は張九齡の感遇詩の一特色といえよう。

ところで陳子昂の感遇三十八首にも、楚辞に由来する語

彙は使用されている。たとえば、

石林何冥密、幽洞無留行。(其六)

焉有石林。(天問)

衆芳委時晦、鸚鵡鳴悲耳。(其七)

昔三后之純粹兮、固衆芳之所在。(離騷)

恐鶉鳩之先鳴兮、使夫百草為之不芳(離騷)

精魄相交構、天壤以羅生。(其八)

羅生兮堂下 (九歌)

挈瓶者誰子、皎服当青春。(其二十四)

靈偃蹇皎服、芳菲菲兮滿堂(九歌、東皇太一)

箕山有高節、湘水有清源。(其三十)

寧赴湘流、葬於江魚之腹中(漁父)

しかし陳子昂の場合には、それは單なる語の使用にとどまる(石林、羅生の例)か、背後に濃厚な楚辭の世界を持つ語であつても(鶉鳩、湘流の例)、その世界の反映は当該する句、あるいはその句を含んだ数句にかざられる。例外的な作品は、感遇其二である。

蘭若生春夏 蘭若 春夏に生じ

芊蔚何青青 芊蔚として何ぞ青青たる

幽独空林色 幽独たり空林の色

朱蕤冒紫葢 朱蕤 紫葢を冒ふ

遲遲白日晚 遲遲として白日は晚れ

嫋嫋秋風生 嫋嫋として秋風は生ず

歲華尽搖落 歲華 尽く揺落するに

芳意竟何成 芳意 竟に何をか成さん

蘭若、青青、紫葢、嫋嫋などは楚辭に用例がある語彙である。またこの作品の主題であるいわゆる遲暮の嘆は、離騷に言う「日月忽其不淹兮、春与秋其代序、惟草木之零落兮、恐美人之遲暮。」とほぼ等しいものである。しかしこの作品も、後述するように、その構成において張九齡の作品とは異なっている。

二

感遇十二首、およびそれと同類の雜詩五首の顯著な特色のひとつは、自身を理解してくれ、信頼を寄せるに足る人物を待望する語彙や句が多くみられることである。たとえ

永日徒離憂 永日 徒だ憂ひに離る

臨風懷蹇脩 風に臨んで蹇脩を懷ふ

美人何処所 美人 何れの所にか処る

孤客空悠悠 孤客 空しく悠悠たり

青鳥跂不至 青鳥は跂つたども至らず

朱鷺誰云浮 朱鷺は誰か浮かぶと云はんや

夜分起躑躅 夜分に起ちて躑躅すれば

時逝曷淹留 時は逝きて曷ぞ淹留せん

このほか、 (感遇、其八)

○庭前攬芳意、江上託微波。(雜詩五首、其三)

○持此謝高鳥、因之伝遠情。(感遇、其二)

○可以薦嘉客、奈何阻重深。(感遇、其七)

○抱影吟中夜、誰聞此歎息。美人適異方、

庭樹含幽色。(感遇、其九)

○漢上有游女、求思安可得、袖中一札書、

欲寄雙飛翼。(感遇、其十)

○浩思極中夜、深嗟欲待誰。(感遇、其十二)

こうした表現の形式は先行する陳子昂の作品にはみられない。陳子昂は、たとえば、

可憐瑤台樹 憐むべし 瑤台の樹

灼灼佳人姿 灼灼たり 佳人の姿

碧華映朱実 碧華 朱実に映するに

攀折青春時 青春の時に攀折さる

豈不盛光寵 豈に光寵盛んならざらんや

榮君白玉墀 君が白玉の墀に榮ゆ

但恨紅芳歇 但だ紅芳の歇くるを恨み

凋傷感所思 凋傷して思ふ所に感ず

(感遇其三十一)

のように表現する。清の陳沆が『詩比興箋』でこの詩を評して「観物述懷之詩。豈不光寵、榮君白玉墀、追嚮用於

前時。」というように、瑤台樹は陳子昂自身をたとえてみるとみることできるが、この珍樹は美しい資質を持つ故に、最も盛んな時(青春時)により折られてしまうという矛盾を孕んだ存在である。この世にない美しい樹として愛賞されたが、ただ悲しまれるのは、そのよき資質が時とともに尽きてしまうことである、と、陳子昂の慨嘆はひたすら凋落してゆく存在に向けられ、信頼するに足る人物を待望する心情は、あまり顕著にみられない。さきにあげた感遇其二も同様であった。蘭若は春夏には生き生きとおのれの生を楽しんでいるが、時節が移ろうとともに凋落してしまい、その馥郁たる芳香も誰にも愛でられず無駄になってしまふ。第七、八句には、香草とそれを愛でる人という対比があるが、表出の重点はやはり、そういう状況の中で凋落してゆく蘭若におかれている。陳子昂の感遇詩に用いられる対象性は、それをとりまく状況の様々な変化によって傷つけられ、たとえそうした状況を拒絶したとしても、それ自身衰退してゆかざるを得ない、そういう構造を有しつつ用いられている。現実の政治世界の中で生きようとすれば、その生き方は死にも至る危険をはらむ(蜻蛉遊天地、与世本無患、飛飛未能止、黃雀來相干)。だがその状況から退いたとしても、時とともに己れの生は損なわ

れてゆく。ではどのように生きればよいのか。陳子昂の慨嘆はここから生ずる。

張九齡の嘆きは陳子昂のこととなっている。いま、先に示した感遇其八について考えてみる。「永日徒離憂（永日徒だ憂ひに離る）」という第一句で、作者は春の日に深い憂愁に沈んでいる。その憂愁は「美人」との邂逅がかなわぬところから生じている（美人何処所、孤客空悠悠）。「美人」は先に挙例したが、楚辭に多用される語彙である。楚辭のなかでそれはまず「うるわしいよき人（男性・女性）」として用いられている。

○満堂兮美人、忽独与余今日成。（九歌・少司命）

○美人既醉、朱顏酡些。（招魂）

さらにはおのれが思慕を寄せる人（主君、ある場合には神格の象徴）として使用されていると解釈される例がある。たとえば離騷の「惟草木之零落兮、恐美人之遲暮。（草木の零落するを惟ひ、美人の遅暮を恐る。）」について、王逸は「美人謂懷王也。」と述べ、清、洪興祖は「屈原有以美人喻君者。恐美人之遲暮、是也。」と述べている。九章・思美人の「美人」も懷王を意味していると解釈されている。また九歌・河伯の「子交手兮東行、送美人兮南浦。（子手を交へて東行し、美人を南浦に送る。）」について、王逸が

「美人、屈原自謂也。」と注するように、屈原自身を指している例がある。張九齡の「美人」は、楚辭におけるこれら三種の用例のうち、おのれが思慕をよせる人格という意味で用いられていると考えられる。「美人」との邂逅もかなわぬまま愛いに沈む作者の前に、その媒となってくれるもの（蹇脩・青鳥）も現われず、時は容赦なく過ぎてゆく（夜分起躑躅、時逝曷淹留）。陳子昂の詩にみられるような時の推移という表出はなされているが、主要な慨嘆は邂逅がかなえられない状況から生じている。次にあげる其十も同様である。

漢上有游女 漢上に游女有り

求思安可得 求むるも安くんぞ得べけんや

袖中一札書 袖中 一札の書

欲寄雙飛翼 双飛翼に寄せんと欲す

冥冥愁不見 冥冥として愁ふれども見えす

耿耿徒緘憶 耿耿として徒らに憶ひを緘す

紫蘭秀空蹊 紫蘭 空蹊に秀で

皓露奪幽色 皓露 幽色を奪ふ

馨香歲欲晚 馨香 歳は晚れんと欲す

感嘆情何極 感嘆 情は何ぞ極まらん

白雲在南山 白雲は南山に在り

日暮長太息 日暮 長太息す

漢水の辺の游女は、詩経・周南・漢広の「漢有游女、不可求思。(漢に游女有り、求むべからず。)」をふまえた表現で、本来は漢水の女神をいうが、この詩のなかでは己れが信頼を寄せ邂逅を願う人格として機能している。悲哀・孤独感の由来は其八と同様である。また高く秀れた資質を有する紫蘭が誰も愛でる者のいない蹊谷で呆えているが、時節の経過とともにその香りも失せ、凋落してしまうことを語る第七句から第十句までの構成は、陳子昂の感遇其二のそれとほとんど軌を一にする。しかし陳子昂の場合、こうした表現の前提となっているのは、己れの生を傷う状況を拒絶したことであり、張九齡の場合は己れが思慕する人格との邂逅がかなえられないという状況であった。なおこの作品の第十一、十二句に「白雲は南山に在り、日暮長太息す。」という表現があり、俗世界を離れた白雲の湧きおこる自由な世界について語っているが、この点については後に考える。

さらに例をあげれば、

幽人婦独臥 幽人 歸りて独り臥す

滯慮洗孤清 滯慮は孤清に洗ふ

持此謝高鳥 此を持って高鳥に謝ぐ

因之伝遠情 之に因りて遠情を伝へん

日夕懷空意 日夕 空意を懷く

人誰感至精 人誰か至精に感ずるや

飛沈理自隔 飛沈 理は自ら隔たれば

何所慰吾誠 何れの所にか吾が誠を慰めん

(感遇 其二)

独り世に隠棲し、さまざまな思いはこの清らかな世界ですっかり洗い清めた。さて遠いかの人におのれのまごころを伝えたいのだが(持此謝高鳥、因之伝遠情)、それはかなえられない(人誰感至精)。そこから彼の嘆嗟が生ずる。また思いを高鳥に謝げるといふ表現も、楚辞のたとえは「思美人」に言う「因婦鳥而致辞兮、羌迅高而難当。(婦鳥に因りて辞を致さんとすれども、羌迅く高くして当ひ難し。)」と同一である。

さらにこの他、

○西日下山隱、北風乘夕流。燕雀感昏旦、

簷楹呼疋儔。鴻鵠雖自遠、哀音非所求。

貴人棄疵賤、下土嘗殷憂。衆情累外物、

怨已忘内脩。感歎長如此、使我心悠悠。(其六)

○我有異鄉意、宛在雲浴浴。憑此目不覩、要之心所鍾。但欲附高鳥、安敢攀飛龍。

至精無感遇、悲惋填心胸。 帰来扣寂寞、  
人願天豈從。 (其十一)

○良辰不可遇、心賞更蹉跎。 終日塊然坐、  
有時勞者歌。 庭前攬芳蕙、江上託微波。

路遠無能達、憂情空復多。 (雜詩五首、其三)

○湘水弔靈妃、斑竹為情緒。 漢水訪游女、

解佩無誰与。 同心不可見、異路空延佇。

浦上青楓林、津傍白沙渚。 行吟至落日、

坐望祇愁予。 神物亦豈孤、佳期定何許。 (同、其四)

など、同様の表現形式がみられる。こうした構造は、張九齡の感遇詩の基底的形式といえよう。

ところで雜詩五首、其四の「浦上青楓林、津傍白沙渚、行吟至落日、坐望祇愁予。」が沢畔に吟ずる憔悴した屈原の姿を連想させるように、これまで述べてきた構成は正しく楚辞の世界の反映である。楚辞の重要なテーマの一つは賢者の不遇のなげきであり、たとえは屈原の代表作である離騷も、王逸が「屈原その譜属を序し、その賢良を率ゐ、以て国士を厲す。入りては則ち王と凶り、政事を議し、嫌疑を決定す。出でては則ち群下を監察し、諸侯に應對し、職修を謀行す。王甚だ之を珍とし大夫に同列す。上官勸尚その能を妬害し、共に之を譖毀す。王乃ち屈原を疏ん

ず。屈原忠貞を執履するに讒邪を被り、憂心煩乱して懇ふる所を知らず。乃ち離騷経を作る。」と述べているように、不遇の歎きが全篇を覆っている。離騷の乱には「已矣哉、国無人莫我知兮、又何懐乎故郷。既莫足与為美政兮、吾將從彭咸之所居。(やんぬるかな。国に人無く我を知る莫し、又何ぞ故郷を懐はんや。既に与に美政を為すに足るものなし、吾將に彭咸の居る所に従はんとす。)」と、現実の政治世界に絶望した屈原の死に至る運命すら予感させる悲痛な表現がなされている。また「九章・思美人」には、

思美人兮 美人を思ひて  
寧涕而竚胎 涕を擲りて竚み胎る  
媒絶路阻兮 媒は絶え 路阻まれて  
言不可結而論 言結んで論るべからず  
蹇蹇之煩冤兮 蹇蹇として煩冤し  
陷滞而不発 陷滞して発せず  
.....  
願寄言於浮雲兮 言を浮雲に寄せんと願ひ  
遇豊隆而不將 豊隆に遇へども將かれず  
因歸鳥而致辭兮 歸鳥に因りて辭を致さんとすれば  
羌迅高而難当 羌迅く高くして当ひ難し  
.....

というように、己れが思慕する人との邂逅がかなえられない歎きが切々と述べられている。張九齡にも同様の悲哀感があった。しかし表現の上からみたととき、張九齡の感遇詩は語彙においても形式においても楚辭の世界に密着しすぎていた。彼の悲哀・孤独感、結局、己れが思慕する人に出合え、自身の心を伝えることができれば解消されてしまふものであった。時の推移に対する歎きも同様で、これは邂逅の副次的要素であり、出合いさえかなえば解消する。張九齡の悲哀感、陳子昂の作品にみられる如何ともしがたく閉塞された生の歎きとは異種のものである。

### 三

この節では、これまで述べてきたものとは異なつた構成を持つ感遇詩について考えてみたい。

江南有丹橘 江南に丹橘有り

経冬猶緑林 冬を経て猶ほ緑林

豈伊地気暖 豈に伊れ地気の暖なるならん

自有歳寒心 自ら歳寒の心有ればなり

可以薦嘉客 以て嘉客に薦むべくも

奈何阻重深 重深に阻まるるを奈何せん

運命唯所遇 運命は唯だ遇ふ所のまま

循環不可尋 循環は尋ぬべからず

徒言樹桃李 徒だ樹は桃李と言ふも  
此木豈無陰 此の木豈に陰無からんや

(感遇 其七)

張九齡の楚辭への傾斜をよくあらわしている作品である。この作品はほとんど楚辭・九章・橘頌にあやかっている。橘頌に言う、

后皇嘉樹 后皇の嘉樹

橘徠服兮 橘徠り服す

受命不遷 命を受けて遷らす

生南国兮 南国に生ず

深固難徙 深固にして徙し難く

更苞志兮 更に志を苞にす

緑葉素榮 緑葉素榮

紛其可喜兮 紛として其れ喜ぶべし

曾枝剌棘 曾枝剌棘

圉果搏兮 圉果搏たり

青黃雜糅 青黃雜糅して

文章爛兮 文章爛たり

………

嗟爾幼志 嗟 爾の幼志

有以異兮 以て異なる有り

独立不遷 獨立して遷らず

豈不可喜兮 豈に喜ぶべからざらんや

深固難徙 深固にして徙し難く

廓其無求兮 廓として其れ求むる無し

蘇世獨立 世に蘇めて獨立し

横而不流兮 横よしまにして流れず

准北に移植すると枳になるといわれている、江南の橘の美しい秀れた資質をたたえたのが、この橘頌である。むしろ屈原は自身の固い節操をこの橘に託して表現しているのであるが、この橘のイメージは、なによりも豊かな現実性を有している。張九齡はこれを承け、江南の橘には逆境に耐える心があるから、冬を経てもなお深い緑をたもっている、と丹橘を賛美する。しかしこの作品では、橘の意味・価値が重視され、像の比喻ではなく意味の比喻(注四)に重点を置いて表現されているために、作品全体が楚辭に比べて觀念的・理念的なものとなり、生き生きとした現実的形象がみられなくなっている。さらに、嘉客に薦めようとするのだが、それがかなえられない、という構成は前節で検討したものと同一であるが、この作品では「徒だ樹は桃李と言ふも、此の木豈に陰無からんや。」と、むしろ橘を積極的に

賛美することによって矛盾がやわらげられている。ただ楚辭で橘は志が固く移し難い存在として使用されているのに対し、感遇其七では嘉客に薦めることのできるものとして機能しているのが特徴的であり、この点では感遇其七は橘頌の翻案であるということができる。

また感遇其九について、

蘭葉春葳蕤 蘭葉は春に葳蕤たり

桂華秋皎潔 桂華は秋に皎潔たり

欣欣此生意 欣欣として此に生意あり

自爾為佳節 自ら爾かくして佳節を為す

誰知林棲者 誰か知らん 林棲の者の

聞風坐相悅 風を聞きて坐ろに相悦ぶを

草木有本心 草木に本心有り

何求美人折 何ぞ美人に折らるるを求めんや

山林に幽棲し、世に用いられることを望まぬ自身を蘭・桂に託して積極的に評価するこの作品は、同様の要素を用いながら激しい矛盾を内包する陳子昂の感遇其三とは似ていない。ここには、思慕を寄せる人との邂逅がかなえられない嘆きやいかんともしがたい時の推移に対する悲嘆はみられず、自得した隱棲者の世界があるばかりである。張九齡にとってこうした生き方は、一つの好ましい可能性として在

ったにちがいない。しかし終に張九齡は自分を真に理解してくれ、自分もまた心から信頼を寄せ、そのもとの活躍したいと願う人格との邂逅ということから離れることができない。この隱棲者の世界もその邂逅を否定的な媒介として求められているのである（何求美人折）。

張九齡は、隱棲者に対する憧憬と、それがかなえられない嘆きを詠じている。

閉門跡羣化 門を閉ざして群化を跡すね

憑林結所思 林に憑りて思ふ所を結ぶ

嘯嘆此寒木 嘯嘆す 此の寒木

嘯昔乃芳蕤 嘯昔は乃ち芳蕤たり

朝陽鳳安在 朝陽 鳳は安くにか在る

日暮蟬独悲 日暮 蟬は独り悲しむ

浩思極中夜 浩思は中夜に極まり

深嗟欲待誰 深嗟して誰をか待たんと欲す

所懷誠已矣 懷ふ所は誠にやんぬるかな

既往不可追 既往は追ふべからず

鼎食非吾事 鼎食は吾が事にあらず

雲山嘗我期 雲山は嘗て我期す

胡越方杳杳 胡越 方に杳杳たり

車馬何遲遲 車馬 何ぞ遲遲たる

天壤一何異 天壤 一に何ぞ異なる  
幽嘿臥簾帷 幽嘿して簾帷に臥す

（感遇 其十二）

このほか、

○海上有仙山、扁期覺神變。（感遇 其五）

○白雲愁不見、滄海飛無翼。（感遇 其九）

○白雲在南山、日暮長太息。（感遇 其十）

雲山・白雲は自由な隱棲者の世界を象徴的に指している。これらの表現についても、さきの感遇其九と同様に考えられよう。総じて張九齡は、隱棲者としての生き方に対しては陳子昂ほどの執着を持たない。

以上、煩瑣ながら主として楚辭との関係を中心に張九齡の感遇詩について考えてきたが、その特色はおよそ次のようにまとめられるであろう。

(1) 張九齡の感遇詩には楚辭的、あるいは楚辭に由来する語彙が顯著にみられる。要素としては、楚辭には使われていたが、従前の詠懷・感遇詩にはみられなかった丹橘が使用されているのが注目される。

(2) 単なる語彙ばかりではなく、詩の主題や内容にも楚辭的世界が反映している。すなわち張九齡の感遇詩の底に流れているのは、自分を真に理解してくれ、自分

も心から思慕する人（具体的には君主を意味し、楚辭の世界にあやかつて「美人」という語が使用されている）を待ち望む心情と、邂逅がかなえられないところから生ずる嘆き・孤独感である。時の推移とともに自身が衰えてゆくことへの慨嘆、また隠遁者としての生き方に対する願望は、あくまで副次的なものであり、邂逅さえかなえば解消してしまふものである。

(3) こうした表現の構造は、先行する陳子昂のそれとは全く異なっている。

(4) 表現の問題としてみたとき、張九齡の感遇詩は楚辭の世界にあまりに密着しており、その翻案といつてもよく、新しい感遇詩の流れを創出することはできなかった。初唐から盛唐にかけての感遇詩の流れは、やはり陳子昂の感遇三十八首から李白の古風五十九首に続いていると考えるべきであらう。

注一 代表的な論考に、大野実之助氏「張九齡とその詩風」(『漢文学研究』八)がある。

注二 『中国文化叢書』5 文学史 一三五ページ。

注三 陳沆『詩比興箋』、劉大澄『唐詩三百首欣賞』等にみえる。

注四 吉本隆明氏『言語にとって美とはなにか』第三章 韻律・

撰択・転換・喩にみえる。